

末黒野

すくろの

1月号 (通巻857号)



秋深む

石垣へ小諸の秋の風粗し
弓道の射る音の音
矢狭間に秋冷む三の門
欄間の額花鳥諷詠爽やかや
縁側に座せば爽籟虚子旧居
秋の雲被き浅間嶺裾展け
松風は松に還らず秋の暮
山風も秋気も海へ鎌倉は
秋深みゆく耕しの一打ごと
湖へ金のひかりを芒の穂
秋草摘み野のはなやぎの掌
谷ひとつ埋めて風呼ぶ秋桜

松本三千夫

今日の幸

波洗ふ石の丸さや鳥渡る
古墳いまだ深き眠りや秋の草
ひとところ風の靡きぬ芒原
よき音の竹の新しぼつたんこ
小鳥来る岐れまた合ふ苑の道
鐘ひとつ聞くや金秋深まりて
紅葉晴庭の内なる山の道
末枯や炊煙うすき山の宿
信州の町にも灘の今年酒
ハミングは小学唱歌花野道
のけ反りて投ぐる釣糸溪紅葉
霧晴れて一湖一天今日の幸

黒滝志麻子

(副主幸)

甲矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）

夕日影

森清堯

木道の一步の湿り涼新た
尻ずしり水の重さの梨を剥く
水引草花頭窓より鼓の音
庭石に坐る末子の秋思かな
金木犀気鬱のはるる夕日影
雲の縁七色に染め秋没日
妻留守の軽さ重さや鴟の声
露天商の仏頂面や榎檀の実
影重ね影離れゆき秋の蝶
団栗のころりぼろつと物忘れ

稲穂

森清信子

雲の影人影さやに水澄める
鶏頭の影細りたる子規忌かな
草叢の闇を引き合ひ虫しぐれ
桔梗や老いても母の自負持たむ
稲架襖雲呼びやすき八ヶ岳
日の落つる前の輝き稲穂波
背に余る背負子の婆や秋桜
倒れても稲穂黄金に輝けり
ト口箱の船名太し去ぬ燕
海沿ひの線路弓なり鱗雲



花野

安齋久英

杣道を一気に早る野分かな
早暁や真一文字に秋の雲
露けしや高きに翔ばず番鳥
霧霽るる観音崎の鼻の先
雲脚の早し忽ち秋時雨
花野去る背に湖の紺深し
小鳥くる動物村の垣の内
潮風に吹かれ仰ぐや居待月
しろがねの雨脚軒に秋深し
夕照や金の縁どる秋の雲

次郎柿

田中臥石

峡の田の粉殻を焚く煙見ゆ
牛売りし小屋へ椎の実転げ込む
飯を炊く匂ひ鴉鳴く松林
台風の地鳴り海鳴り停電す
養老の黄葉最後の夫婦旅
波郷忌の近づき次郎柿を買ふ
茸飯炊けり午睡の妻起こす
明日は明日けふ生きてをり茸汁
味噌も糠も妻の手塩や秋茄子
鰐口を鳴らすたまゆら草の露

銀河の端

石黒興平

風媒といへど確かや稲の花
稲刈や一家総出の四世代
時として醜草も刈る稲刈機
聞こゆるは水の音のみ下り梁
海鳴りの小さく大きく夕野分
ごみ見るほどに南蛮煙管かな
姿勢良き御陵の守部一位の実
書き置きの文鎮がはり柿一つ
石庭を設ふ駅や曼珠沙華
何遺さん銀河の端に生を受け



乙 矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）



シユレッダー

小田嶋野笛

酔芙蓉

岡野里子

鐘の音や夕日隠れの酔芙蓉
町川に火の色流し秋落暉
長々と鳴いてふつつり秋の蟬
法師蟬日照雨の後の樹々の照り
数珠玉や水輪重ぬる雨の池
休み田の賑はふ風や秋桜
精いつぱい今日を生きたり酔芙蓉

野分雲

加藤静江

四車線隔つ挨拶秋日傘
かなかなや駄句を囁ませるシユレッダー
蟪蛄の怒りとほして逝きにけり
墓ぬらす朝の日照雨や秋彼岸
他愛なき根の抗ひや貝割菜
秋郊や骨の鳴る膝連れて来て
虫の夜の雨の夜となる速夜かな
千切れては早さを増せり野分雲
野分あと雲間の夕日濃かりけり
乾びたる水車や秋のきりん草
梁黒き庄屋の名残り衣被
羽欠けて草に息つぐ秋の蝶
深々と色を尽くしぬ稲の秋
名刹の茅葺き厚し一位の実

稲 光 菅野日出子

町内に牛舎の名残り葛の花
一刷の雲を残して台風過
八つ橋を会釈でゆづり秋日傘
納骨の法話の長し蚊の名残
鈍色の光悦寺垣萩なだれ
大観の謂れの宿や新松子
島影をしかと闇夜の稲光

夜業の灯 齊藤マキ子

人影の二つ動きて夜業の灯
葛覆ひ秘密基地めく作業小屋
天高しダム擁壁の鉄梯子
ままごとに慶事あるらし赤のまま
見返れば心あるかに案山子翁
新米をにぎる三角丸四角
星屑の降りこぼしてや草の露

十五夜 堺 昌子

宵の口十五夜に雲なかりけり
つれづれやつい口の端に秋暑し
葬歸りの秋保大滝身に入むる
水車小屋水のリズムの秋の音
身の中の石段のぼる竹の春
子と孫と揃ふ昼餉や茸飯
柿の実の色づく姉の一周忌

雁渡る 吉田きみえ

片言の曾孫おもたし涼み台
秋の灯をつらねて湾の波たかし
雁渡る夕日の沼のさざれ波
虫止みて闇の深まる夜明け前
秋蟬の目覚めの明けの星の数
初紅葉溪の深さの水光る
ひとり居の部屋の黄菊の明かりかな

青炎集

松本三千夫選



横浜 戸田澄子

通院の上着の胸に赤い羽根

呆けまじと詠む一行詩落葉道

花すすき揺れて句ごころ蛇笏の忌

早や六年遺影の夫と秋惜しむ

二度わらし身ぬちにひそむ秋思かな

降りつづく雨に重みの秋寒し

大網白里 亀卦川菊枝

叢雲の一点明し月今宵

鴟猛る佐倉城址の子規の句碑

降り続き落ち銀杏の香を流す

十一万石の佐倉や秋祭

木瓜の実のものぶ振りや武家屋敷

茅屋根に雨音沈む柿紅葉

横浜 太田良一

ふるさとの香りを噛めり今年米

海路また月の道あり遠汽笛

名画座の消えたる街の無月かな

花野行く名刺不要の二十年

秋蝶やステンドグラスに色重ね

山越の岐路に迷へり芒道

横浜 高木邦雄

夕照の津軽海峡雁渡る

津軽富士里は黄金の豊の秋

鬼の子や流離ごころの風の中

厨棚妻の挿したるねこじやらし

秋霖やおやつ和栗のモンブラン

大花野貫く川の水豊か

横須賀 大川 暉美

雨霽弾く紫紺の秋茄子
稲刈の畦へ香りの膨らみぬ
風さやぎ地蔵櫛る猫じやらし
子規庵へ時をあづけて秋の昼
屋上へ上がるや四方の秋気澄み
鴉啼きて風が背を押す切通し

横 浜 正 谷 民 夫

芒てふ風を活けある木曾路かな
行き合ひの空へまぎるる帰燕かな
ひんがしへ空がずれゆく鱗雲
行人の見えずなりけり秋の雨
遺品のペン貰ひて帰る夜半の秋
協往還立場の跡を鳳仙花

横 浜 神 谷 さ う び

菊坂や路地から路地へ秋の風
一葉の使ひし井戸や小鳥来る
文人の旧居跡の碑秋寂びぬ
身に入むや文士の旧居跡のビル
三四郎池の波紋や鴟猛る
秋うらら本郷に買ふ加賀名菓

横 浜 上 月 智 子

秋空やきりんの咀嚼長と
秋蝶の揺られしままや草の蔭
ななふしの枝と紛ふや藤袴
曼珠沙華色落としをり大雨に
息を継ぐ野分や確と潮の香
茸飯土鍋の底の香を返し

横 須 賀 福 田 禎 子

故郷の山の匂ひや栗の飯
墓山や色なき風の海に抜け
鈴虫や木道照らす常夜灯
断崖をこぼるる萩や背に肩に
コスモスや子等を飲み込む百万本
夕照の森戸の富士や新松子

横 浜 根 本 公 子

爽やかや募金の唱和女子校生
橋の名を諳んじ歩く水の秋
マネキンの遠まなざしや秋の声
遠き日を綴る数珠玉夕あかね
郷愁てふタンゴの調べ秋惜しむ
青き夜の月の精とも銀木屋

耕 土 集

黒滝志麻子選

田周の中のしあはせ秋日傘 鎌倉 丸山千穂子

萩零れ零れて雨の宝戒寺

天平の塔高くあり小鳥来る

雑木山の風鳴る径やまゆみの実

秋深し水琴窟の音響き

朝曇り咽に貼り付く飲葉 横浜 是松 三雄

日は山に蜻蛉は草に沈みけり

子規庵のへちま叩けばぼこと鳴り

ソムリエのコルク抜く音夜半の秋

秋灯の淡きを選び縄暖簾

庭木みな丸く刈り込み涼新た 横浜 久貝 芳次

秋場所や雪駄のひびく車寄せ

野分けあと庭木飛び交ふ朝雀

俳壇を又読み返す夜長かな

稜線の茜に染まり鳥渡る

天高し学童の声響き合ふ 西東京 河口 知重

船の水脈白波立てて秋高し

恙なく詩を吟ずるや敬老日

天災をめげぬ棚田の稲穂かな

ダンボール開くれば書籍秋夜長

子を抱くパンダ案山子や畦の道 横浜 松橋 輝子

皓皓と主なき庭今日の月

白壁に沿ひたる川面望の月

オリーブの青き実撓わ島に満つ

勧めらるる猫背の秋刀魚いと旨き

鳴立つや大磯に磯見当らず 横浜 小長谷 紘

屋敷町の藤村旧居秋深し

月影や芝に埋もる石畳

雨月とて酒のやさしく喉下る

栗剥くや指まつくろに老いばみて

棚 経

小川 玉泉

(名誉顧問)

子に託す魂棚飾り終はりけり
朗々と僧の棚経始まりぬ
稲の穂を添へ新米を賜りぬ
妻の味そのまま子より柿なます
窓空かし木犀の香を導きぬ
棟上げの木槌のひびき天高し

雑記帳 6

我が家の盆行事は、昔ながらの八月に行く。
跡継ぎの若い僧が檀家を回って読経をする。六
尺近い大柄の僧に合わせての読経に心が洗われ
る思い。受け継ぎたい習慣である。